



この二枚の写真はバスの車窓から眺めた景色である。瀾滄江沿いの大きな盆地になっているこの地域には熱帯雨林の原生林がある。かなり失われている様だが保護区に指定されている。観光案内にある熱帯植物園や野象の谷があるのが左の写真の付近だ。道に看板が出ているし、観光客が歩く道がある。右の写真はガイドの説明ではゴム園だそうだ。国営のゴム畑で生ゴムの生産はこの特産品の一つになっている様だ。ゴム園はいたる所で見られた。資料によると 90%近くの熱帯雨林が失われたとある。このゴム園の開発がその主たる原因なのだろう。それ以前の風景はもっと違ったものであったらと思う。

景洪から南方向に瀾滄江に沿ってその下流にバスで行く。40km 弱の所に「カンランバ」というタイ族の町がある。そこにある自由市場の見学をした。

地図を見ると、そこはラオスとの国境に近い。東南アジアの風景が続いていた。



左が市場の入り口になっているがこの道路の向かい側にも農産物主体の市場があるし、商店があり露天商が店を広げている。この周辺一体が市場になっていた。

自由市場というのは公設市場でないことだ。この周辺にはタイ族の村が点在していると聞いている。それぞれが生業としている物を持ち寄って売買している素朴な姿がここには有った。右の写真は市場前の道路に店を広げている人たちである。手前の籠には鶏が入っている。大きくて籠に入らなかったのだろう。あひるも売り物だ。

カンランバに到着してバスを降りるとまずそこには市場の雑踏があった。市場の建物の外にある道路まで露天での売り買いが盛んに行われていた。



## 路上の市場



瀾滄江で獲ったのだろう魚が無造作に置いてある。鶏が入った籠は竹製の手作り品だ。



魚は日本では見かけない種類だが旨そうだ。おそらく揚げ物にするのだろう。不揃いなので目方で値決めしているのだろう。秤があった。そのそばであひるの値段交渉がされていた。

子供たちが興味深げに見ている。そして売買が決まって運ばれていくあひるに近寄って話しかけているようだ。

市場の中に入るまでもなく、入り口周辺の道路脇に露天の店が並んでいる。この付近は自分の家で加工した食品が売られているようだ。瓶詰めにしたものやその場で焼いたり揚げたりしたお惣菜風のものもある。その内容は大理、麗江地域で見たものと違って、東南アジアそのものと言って良いものだ。



## 農産物市場

メインの道路から入ると大きな広場に屋根を掛けただけの市場があった。ここは朝採りらしい野菜類が主として売られていた。

農家の人が持ち込んできて店開きしている様だ。まさに自由市場という感じがする。





市場の様子を写した写真の一部を羅列した。売られている野菜は種類も多く立派なものが多い。

そして売り手も買い手も活気に満ち溢れていた。左一番下の写真の奥に数人いるのは現地ガイドの話聞きながら見学している私の同行者たちで、他に観光客らしい人は見かけない。ここに居る人たちは全てここで生活している人たちなのだ。